

主 題：キリスト者の終活

聖書箇所：テサロニケ人への手紙第一 5章1-11節

テーマ：あなたは、主イエス・キリストにお会いする備えができていますか

序：実は、2ヶ月ほど前に我が家の新聞の折り込みにこのようなチラシが入っていました。「墓活」と。これを見て笑ってしまいました。「墓活」とは何でしょう？あなたの最善の墓を見つけますよというチラシでした。考えてみると、世の中には「～活」ということばが溢れています。それは「ある事を実現するための働き、あるいは、活動のこと」と言えるでしょう。「婚活」「就活」、そして、人生を終えるに当たっての「終活」と。今日は私たちの「終活」について、ごいっしょにみことばから学んでいきたいと思います。

《キリスト者の終活》

世の人々が言う「終活」は若い人たちは言いません。今日は敬老の祝福がありましたが、それに該当する人たちに言われることでしょうか。でも、キリスト者の「終活」は年齢が若い、老いているに関係なくすべてのキリスト者に当てはまることです。だから、「若いから私には関係ありません」ということではありません。なぜなら、キリスト者の「終活」は「永遠とともに過ごすために、私たちが迎えに来られる主に会う準備」だからです。主はこう言われました。「わたしはすぐに来る」（黙示録22：7、12、20）と。私たちは主が天に帰られた約二千年前から、ずっと主が来られることを待ち望みつつその備えをしていなければならなかったのです。でも、「すぐに来る」と言われた主のことばに対してある者は「いやいや、まだまだ来ない。また、あなたもまだまだ死なない。だから、好きなように過ごせばいいのよ。」と惑わすものがあるのです。サタンです。サタンは世の人々を惑わすだけでなく、私たちキリスト者を惑わします。囁くのです。「イエスはまだ来ない。だから当分の間好きなことをしていらいいよ。そのほうが楽しいよ。」と。

ときに私たちはこの惑わしに心奪われて世の人たちと同じような生き方をしてしまうことがあります。でも、主は言われます、「わたしはすぐに来る」と。8月30日の礼拝メッセージで引用されたジョン・オーエンのことばは「サタンの最大の功績は、自分自身の永遠の幸せを考えるのに、死まで十分な時間が残されていると人々に思わせたことである。」でした。

私はこの1年半で二つのガンを経験しました。まさか、この短い期間に自分が二つものガンを患うとは思っていませんでした。私たちには遠い将来のことではなく、明日のこと、あるいは、今日のことさえ分からないのです。私たちは先のことについて勝手に想像するだけで確かなことは何も分からない。主はすぐに来られる、確かに二千年経ちましたが「すぐに来られる」のです。今日はそのことについてごいっしょに学んでいきましょう。

— 主は来られるのか —

1. 二つの再臨

「主は来られる」、これは再臨です。ギリシャ語では「パルーシア」で「王としての訪問、出現、到来」の意味です。皆さんがよくご存じのヨハネの福音書14：2-3には「2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのものと迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」と、主イエスは「また来て、あなたがたをわたしのものと迎えます。」と言われました。使徒の働き1：11をご覧ください。「そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」「またおいでになります。」とこのように「白い衣を着た人がふたり、」（1：10）が言ったと書かれています。

旧約聖書ゼカリヤ書14：4にも「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリブ山の上に立つ。…」と、このような預言があります。黙示録1：7には「見よ、彼が、雲に乗って来られる。…」とあり、先ほども見た黙示録22：7、12、20には「見よ。わたしはすぐに来る。」「見よ。わたしはすぐに来る。」「しかり。わたしはすぐに来る。」と書かれています。この再臨は二つあります。

1) 空中再臨(携挙)：Iテサロニケ4：16-17、ヨハネ14：2-3

一つは「携挙」と言われる「空中再臨」です。そのことについてはIテサロニケ4：16-17に「16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲

の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」と書かれています。また、先に見たヨハネ14：2-3にも記されています。

では、この「空中再臨」「携挙」とはどのような再臨なのでしょう？

- ・クリスチャンのために来られる
- ・先に死を迎えたクリスチャンたちをよみがえらせる
- ・そして、生き残っている聖徒たちを天に引き上げる

これが「空中再臨」「携挙」です。

2) 地上再臨 : マタイ24-25章

もう一つは「地上再臨」と呼ばれるものです。これはマタイの福音書24-25章を見ると詳しいことが記されています。これは、

- ・天に挙げられたキリスト者とともに主イエスは来られる
- ・そして、これは地上への再臨です

先ほどゼカリヤ書を見ましたが、まさに、オリーブ山に主の足が立つのです。これは「世をさばくため」に主は地上に帰って来られるのです。ヨハネ5：29「善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。」。

☆ I テサロニケ5：1-11を学びましょう

この箇所は、主の来臨以前に死んだ人々についての不安に答えた4：13-18に繋がっています。それを受けて5：1-11が書かれているのです。

2. 再臨のときについて 5：1-5

この箇所を読みます。「1 兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。2 主の日が夜中の盗人のように来るといことは、あなたがた自身がよく承知しているからです。3 人々が「平和だ。安全だ」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。4 しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。」

1) 夜中の盗人のように来る 1-2節

再臨はいつ来るのか？「夜中の盗人のように来る」と書かれています。この1節の書き出しは「兄弟たち」となっています。2：1も4：1も同じように「兄弟たち」「兄弟たちよ」とありますが、1：4にはこのように書かれています。「神に愛されている兄弟たち。…」と。ですから、5：1に書かれている「兄弟たち」も「神に愛されている兄弟たち」です。それは、イエス・キリストの十字架により、聖霊の働きによって、神を父と呼ぶ恵みに与っていることを表しているのです。

「いつなのか」 = 継続的は時間、「どういつか」 = 正確な時間

2017年版聖書では「その時と時期について」となっています。

「書いてもらう必要がありません。」、これも2017年版では「書き送る必要はありません」です。これは主の来臨についてパウロはすでにテサロニケの人々にその知識を教えていたからです。1：10がそのことを示しています。「また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。」と。「待ち望むようになった」のはテサロニケの人たちです。また、「その時」が記されていないのは、「その時」を記すことによって彼らが「その時」に合わせた生活をするようになることになるとパウロは知って、そのようであってはならないというパウロの思いがあったのかもしれないが、パウロはテサロニケの人たちに「主は来られる」ということを教えていたのです。

2節はそのことを強調した書き方になっています。2節はギリシャ語原文では「あなたがた自身」が文頭にあってそれを強調しています。1節を更に強調して「あなたがた自身がよく承知しているから」と言うのです。主が来られることについて「よく」「綿密に、正確に」承知している」ということです。

「主の日」とはここでは再臨のことです。主は「夜中の盗人のように来る」とありますが、私たちにはよく分かります。もし夜中に家に盗人が入ることを考えると、「今日～時にあなたの家に入ります」なんていうことはありません。突然です。何の予告もなく、私たちが油断しているときに入って来ます。まさに、そのことを言い表しているのです。「来る」というのは現在形です。パウロは今来る、目の前に来ると、そのことを私たちに明らかに教えるために現在形を使ったのです。だから、主が来られること、主の再臨は必然のことです。でも、それはいつなのかはわからないのです。だれにもわからないのです。

2) その時に起こること 3-5節

その後、パウロは何が起こるのか？そのことについて3、4、5節で教えています。

a. 「人々」 3節 : 3節には「人々が」と書かれています。これは「キリスト者以外の人々」です。この人たちは「平和だ。安全だ」と言っています。この「言っている」も現在形です。まさに、再臨が起きるその瞬間までという意味です。「平和だ。安全だ」ということばは人々の生活態度を表しています。これは新約時代のクリスチャンだけでなく、旧約時代の人たちもこのようなことを言っていたことが記されています。エゼキエル13:10「実に、彼らは、平安がないのに『平安』と言って、わたしの民を惑わし、壁を建てると、すぐ、それをしっくいの上塗りしてしまう。」、エレミヤ6:14「彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。」と。だから、旧約から新約に移っても世の人々の姿は何も変わっていないのです。彼らは「平和だ。安全だ」と言って過ごしているということです。

そのことについてペテロはこのように教えています。Ⅱペテロ3:3-4「:3 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、:4 次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」、5節には「こう言い張る彼らは、…」とあります。まさに、旧約時代に『平安だ、平安だ』と言っていた世の人々は、新約の時代にもこのように「言い張る」とペテロは言うのです。彼らはイエス・キリストの再臨を信じていません。だから、3節に「あざける者ども」と記されているのです。

5:3に戻って「突如として滅びが彼らに襲いかかります。」とありますが、「突如として」ということばはルカ21:34には「あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい。」と「突然に」と訳されています。そして、「…襲いかかります。」も現在形です。まさに、襲いかかったと言うのです。「滅び」とは神からの完全な分離を言い表しています。Ⅱテサロニケ1:9では「そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」、「永遠の滅び」と記されています。

そして、「ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」とあります。女性の皆さんが経験する出産と類似したところがあると言います。それはa) 突然痛みが来る、b) 避けられないことだからです。「それをのがれることは決してできません。」とありますが、これは二重の否定語が使われています。「決してのがれることはできない」と言うのです。キリスト者以外の者には突如として滅びが襲い掛かります。

b. キリスト者に対して 4-5節 : では、信じているキリスト者に対してはどうか？4節に「盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。」とあります。そのことが4-5節に記されています。その理由として、

イ. キリスト者は暗やみの中にはいないから 4節 : 「暗やみ」とは不信者の神から離れた霊的・道徳的状态を表すことばです。今のこの世は暗やみの世界です。なぜなら、その主人はサタンだからです。サタンが支配しているこの世は暗やみの世界です。しかし、私たちはそこから救い出されたのです。パウロはこのように言います。コロサイ1:13「神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」と。エペソ5:8にも「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」とあります。私たちは暗やみの圧政から救い出されて、今はキリストの光の中に招き入れられた者です。「暗やみの中にいない」、それが「襲うことのない」理由の一つです。

ロ. 「光の子ども」「昼の子ども」だから 5節 : 昼は光の支配する領域です。昼は太陽が照らして明るいのです。そのような時間帯です。「光の子ども」children of light = 「昼の子ども」children of the day、この「昼の子ども」はここにだけ出て来ることばです。

ここで皆さんに気付いていただきたい「ことば」があります。それは1節から5節の前半までは「あなたがた」と二人称の複数ですが、5節の後半から10節までは「私たち」と一人称複数になっていることです。なぜ、パウロは「あなたがた」から「私たち」とことばを選んで書き記したのでしょうか？それはパウロは自分も含めて、キリスト者すべてが「暗やみの者」、神に敵対する者ではないことを言い表すために「私たち」ということばを使っているのです。

「光の子ども」はもちろん、光の中に属する者たちです。ヨハネの福音書1章では「光」について言及されています。1:4-9「:4 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。:5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。:6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。:7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。:8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。」、9節には「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。」とあります。この「光」はイエス・キリストのことです。「光」とは「神の臨在とその愛顧を指すことば」です。

「光」と「暗やみ」を比べてみると、このように私たちは知ることができます。

「光」 ⇒ 「喜びの源」、「祝福の源」、「いのちの源」であること

「暗やみ」⇒ 「悲しみ、苦しみ」、「敵意」、そして、何よりも「暗やみ」が示すところは「死」

このように「光」と「暗やみ」に共通するものは一つもありません。全く相反する意味をもったことばです。

3. 二つの生き方 6-8節

パウロはここで「二つの生き方」に言及しています。6-8節「:6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。:7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていきましょう。」

a. 暗やみの者 : 6節に「ほかの人々」と書かれています。彼らはどのような生き方をしているのか？どのような特徴をもった生き方をしているのか？

イ. 眠っている : これは「霊的な目が開かれていない」ということです。霊的な無感覚を言い表しています。

ロ. 酔っている : このことばの一時的な意味は「酒に酔う」ことですが、それだけでなく「実際的な不品行な生活」を言い表すことばです。

ですから、「暗やみ」の者たちは霊的な心の目が開かれていないと同時に、彼らの実際は不品行な生活を行っていると言います。

b. キリスト者たち : 8節に「私たち」とあります。キリスト者を指していますが、パウロは三つのことを言っています。「目をさまして」、「慎み深く」、そして、「神の武具を身に着けて」と。

イ. 目をさまして : 「暗やみの者たち」は眠っている、でも、あなたがたは「目をさまして」いなさいと言います。これは「心の目を開いていつも主を覚える」ということです。霊的な覚醒です。

ロ. 慎み深く : 直訳は「酔わないで」で、そういう意味をもったことばです。「暗やみの者たち」は酔っていました。エペソ5:8-9には「:8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。:9 一光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。」とあります。光の子どもらしく、節度のあるバランスの取れた生活をしなさいということばです。

ハ. 神の武具を身に着けて : 8節には「信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、」とこのように記されています。神の武具については、エペソ6:13-17に「:13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、強く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。:14 では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、:15 足には平和の福音の備えをはきなさい。:16 これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。:17 救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。」と書かれています。また、ローマ13:12にも「夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。」とあります。

8節に見る「信仰、愛、望み」とこの三つのことばは1:3にも「絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐を思い起こしています。」と書かれています。ここでは「信仰の働き」、「愛の労苦」、「主イエス・キリストへの望み」となっています。「信仰の働き」、「愛の労苦」は「胸当て」としてからだの中心を守ります。「主イエス・キリストへの望み」は「かぶと」としてかぶります。これが私たちに教えていることは、キリスト者の姿は主から与えられた使命に忠実に生き、主を待ち望むということばです。

ちょっと考えてみましょう。皆さんよくご存じのIコリント13:13にも同じことばが三つ出て来ます。「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」と「愛」が一番すぐれているとあります。Iテサロニケでは「望み」が最後に書かれています。それは、「望み」が強調されているのです。これは、主とお会いすることへの強い確信、望みです。皆さん、私たちキリスト者の最高の望みは何でしょう。恐らく皆さんは「主イエス・キリストとお会いすること」と答えるはずで、そうです。私たち救われた者の最高の望みは、主と顔と顔を合わせるときが来るといことです。主とお会いするそのときが来るといことです。

4. キリスト者とは 9-10節

パウロは6-8節でキリスト者に向かって「目を覚ましていなさい、慎み深く生活しなさい、そして、神の武具を身に着けなさい」と言った後、9節へと進みます。9節の初めに「神は、」とありますが、英語の聖書では「For God」と「For」という接続詞が付いています。これが大切なのです。なぜなら、8節までに見たキリスト者について、9-10節でもまた「キリスト者とはどのような者か」を教え明

らかにするからです。「9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。10 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。」

先に見た通り、私たちキリスト者は「光の子ども、昼の子ども」です。この9-10節ではあることばが使われています。それは「定める」ということばです。大切なことばです。これは「救いにおける神の主権を明らかにしている」、救いにおいて神が主権をもってそのようにされるということ。「定める」ということばは明らかにしています。

1) キリスト者とは

キリスト者とはどういう者たちなのか、パウロが教えることは四つです。

a. 神の御怒りに会うことがない

神の怒りに会う者についてエペソ2:3、5:6でこのように教えています。「2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」5:6 むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行いのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。」と。

b. 主イエス・キリストにあって救いを得た者

「あって」を別のことばで言うなら「主イエス・キリストにより」、あるいは、「主イエス・キリストを通して」となります。ヨハネの福音書14:6に「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」、わたしだけがあなたがたに救いを与えることができる者だと教えるのです。

c. 主が私たちのために死んでくださった

キリストの死、十字架は私たちのためであったということです。Iペテロ2:24「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」、Iコリント15:3「私があなたがたに最もたいせつなことから伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、」

d. 主とともに生きる

「目ざめていても、眠っていても、」とは「生きるにしても死ぬにしても」ということです。私たちキリスト者はすでに天国民として生きています。ローマ14:8「もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」、ピリピ1:21「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」

パウロはこのように9-10節を通して「キリスト者とはいかなる者か」を明らかにした後で、11節のことばを語ります。

5. 主イエス・キリストに会う備え 11節

11節「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」、パウロはテサロニケの人々に対して「主が来られるから」とその備えを勧めます。「ですから」、英語の聖書では「therefore」という接続詞が使われています。「そういうわけですから」ということです。今まで語って来たことを受けてこの後を続けるのです。ここに来て再び二人称複数「あなたがた」に戻っています。「今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」と呼び掛けています。

「今しているとおり」は、2017年版聖書では「現に行っている通り」と訳されています。Iテサロニケ4:1では「終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。」とあって、「事実いまあなたがたが歩んでいるように、」と、パウロはこのテサロニケの人たちがどのように歩んでいるのかよく分かっていたので「今しているとおり」と、彼らが主が彼らを救われたその目的に沿って生きていたことを分かっていたので「そのように生きてください、そのように歩んでください」と言ったのです。そして、二つの命令を記しています。

1) 二つの命令

a. 互いに励まし合う : これは「心を奮い立たせる、力づける、助け合う」という意味です。ヘブル10:25にはこのように書かれています。「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」と。

b. 互いに徳を高め合う : これは「建て上げる」ということで、お互いの霊的成長のために努めなさいと言うのです。エペソ2:21-22「:21 この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、:22 このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」、Iペテロ4:10「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良

い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」、

2) 主が来るのは近い

パウロは「主が来られるのは近い」からそのことを覚えてテサロニケの兄弟たちにこのような命令を与えました。冒頭で言いましたが、「わたしはすぐに来る」と言われています。でも確かに、それから約二千年経ちました。二千年経ったからもう来ないではなくて、まさに「直ぐに来る」という、時間的なことから言えばまさに目の前に迫って来ていると私たちは考えるべきです。黙示録 22 : 12にはこのように書かれています。「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」と。

a. **キリスト者は** : キリスト者の皆さん、この主のことばを聞いて皆さんはどのように応答されますか？パウロはテサロニケの人たちに「今しているとおりにしなさい。今しているとおりに歩みなさい。」と言いました。私たち一人ひとりそのことを考えるとき「今しているとおりこう生きることが正しいのだ。」と知っているのでしょうか？あるいはまた、「私の歩みは間違っている。だから、今日から主が言われるように歩む。」と、そのように決心されたのでしょうか？

私たちが救われたのは、私たちを救ってくださった主には目的があるということです。ただ単に、永遠のいのちを与えるだけではありません。それはみことばが記しています。「神の栄光を現わすために」私たちは救いの恵みに与ったのです。Iコリント6 : 20「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」、Iコリント10 : 31「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」、

ですから、私たちは地上にいる間、この目的に沿って生きることが大切です。その備えをしなければいけないということです。

b. **信じていない人は** : また、この中にイエス・キリストを信じていない方がおられるなら、その人たちにこう言います。ヨハネ5 : 29「善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。」と。この「悪を行った者」とは「イエス・キリストを信じなかった者」です。彼らは「よみがえってさばきを受けるのです。」。このさばきを回避する唯一の方法は「主イエス・キリストを自分の救い主として受け入れること」、それ以外に方法はないということです。

パウロは主からあることを言われました。それは使徒の働き26 : 18-20に記されています。「:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。』、これがパウロが主からいただいた使命でした。:19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、:20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです。」、これがパウロの働きでした。罪人に対して「悔い改めて神に立ち返り、」とそのことを宣べ伝えて来た。

まだイエス・キリストを信じていない方は、このイエス・キリストを信じる信仰によってさばきから回避することが可能となります。これしかあなたには道がありません。

c. **すべての者がこう告白するべき** : そして、主が一番願われることはすべての者たちがこう告白することです。「主よ、来てください。」と。今、私たちの心の中にこの思いがあるでしょうか？「主よ、まだ来ないでください。」とこのような思いを私たちは持っていないのでしょうか？「主よ、来てください。」「主よ、来てください。」。主はこのように言う者たちを待っておられます。